



● 北畠顧問を偲んで

北畠名誉会員の突然の訃報に衝撃を受けられた研究会員は多かったでしょう。

このニュースを取り上げてもいいという知らせが届きましたので、思ったことを書いてみます。

北畠先生には、私が学会に入った 1994 年当初から指導を受け、さらに、二人で色彩教材研究会を立ち上げて、最近までの濃密なお付き合いでした。

私が 1994～97 年に関東支部長を務め、次の 2 年間は北畠先生が関東支部長を務められて、二人で色々なイベントを企画し、実行しました。

日本色彩学会のホームページの色彩教材研究会を検索すると、北畠先生の貢献がよくわかります。再度、チェックして、今後の研究会活動に活かせる内容を探して、検討してみてください。

また、韓国の色彩学会に呼びかけて、ソウルで交流会をもったことも、思い出に残っています。

パーソナルカラーというシステムがアメリカから入り、日本における普及に、学術面や技術面で貢献されたことも、忘れてはならない功績と思います。（顧問 永田泰弘）

●「視覚」考

明るい陽の下で見る紅葉は色鮮やかですが陽が落ちるとともに色を失います。明るい所で見えていた細かな文字や形を、暗い所でははっきり見分けることができません。暗い夜空を眺めているとき視野の端に小さな星の瞬きを見つけて、その方に視線を合すと消えてしまうことがあります。明るい所から暗い所に入ると暫くは何も見えず、逆の場合は眩しさを物が見えにくくなります。網膜には錐体と杆体の 2 種類の視細胞があり、錐体の数は約 650 万、特性の異なる 3 種類があります。杆体の数は約 11500 万、1 種類のみ。

それらが約 100 万本の視神経につながっています。最初に述べた現象は、錐体と杆体の特性・感度の違い、錐体と杆体の数の違いと網膜における分布の偏り、そして錐体および杆体と視神経の接続方法の違いに起因します。例えば、私たちの眼は超微粒子のカラーフィルムと、超高感度の白黒フィルムを備えていることになります。金子隆芳「色の科学、みすず書房（1975）から学びました。

私たちは暗い所での色覚を与えられていませんが、却って白と黒、明暗、陰影など見えの多様性を得て、私たちは生活の中で、それを楽しんできたように思います。（久下靖征）

●大辞泉ひろいよみ 95 一こ

媚茶：こびちゃ。黒味がかった濃い茶色。

胡粉：ごふん。日本画でもちいる白色顔料。カキ殻を粉碎・水簸・乾燥したもので、主成分は炭酸カルシウム。室町時代以降用いられ、それ以前は鉛白をいった。

胡粉絵：ごふんえ。胡粉を塗った地の上に、墨・丹・緑青・黄土などを用いて描いた絵。

胡粉地：ごふんじ。漆塗りの下地として胡粉を塗ったもの。

五宝：ごほう。仏語。五種の代表的な宝。陀羅尼集経では、金・銀・真珠・珊瑚・琥珀。

古墨：こぼく。製造後、年月を経た墨。

濃緑：こみどり。濃い緑色、深緑。

小麦色：こむぎいろ。小麦の種子のようなつやのある薄茶色。特に健康そうに日焼けした肌の色にいう。

小紫：こむらさき。江戸初期の江戸吉原三浦屋の遊女。刑死した愛人、平井（白井）権八のあとを追って自殺。浄瑠璃や歌舞伎などに脚色。

小紫：こむらさき。タテハチョウ科の蝶。

濃紫：こむらさき。濃い紫。赤みが少なく、ほとんど黒又は紺に見える紫色。三位以上の袍の色などに用いた。深紫。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）